



# 山勝電子工業株式会社

代表取締役社長

金究武正氏

## 次を読む勝負勘で前進してきた ― 関連企業



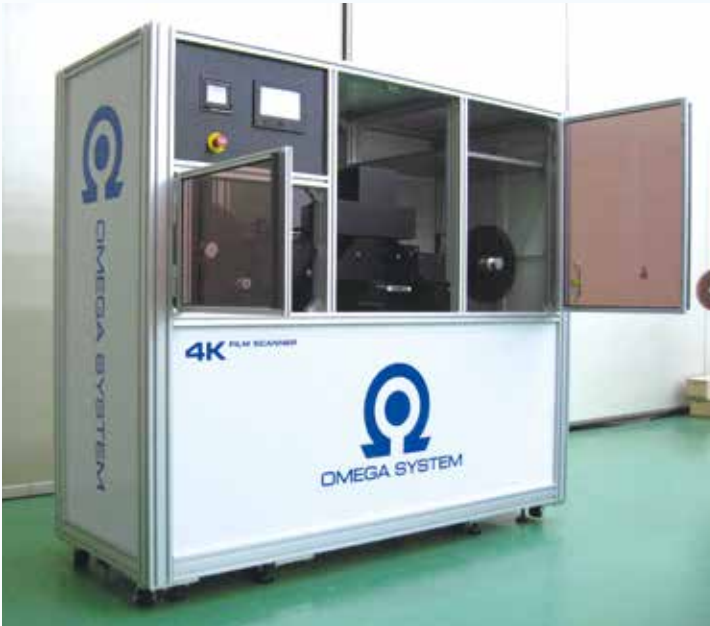
取材・構成 ● 西原勝洋

経済評論家

「非エリート集団による凄い先端技術企業」などと言ったら失礼だろうか。創業社長の金究武正氏かみくつたけまさは工業高校卒、開発陣も故郷の田園地帯に戻ったものの能力を生かせる仕事がなく悩んでいた人が多い。その山勝電子工業株式会社やまかつでんぎよくが、大学院卒のエリート研究陣が集まる大手企業が造らない、いや、造れない機器を開発し、次々と世に出している。努力は当たり前、「目の付け所」と「勝負勘」が冴えているのだ。

### スタートは 3畳の事務所から

最近のヒットは、「オメガ・システム4K」と名付けられたフィルム・スキャナーだ。35ミリあるいは16ミリの古い映画フィルムを、高精細の4K（フルハイビジョンの4倍の画素数）映像に



世界初の古い劣化フィルムにも対応可能。35ミリ映画フィルムデジタル化装置「オメガ・システム4K」

代表取締役社長 金究武正 氏

変換するシステムだ。  
フィルムキャリアに密着させた状態で、フィルムを送りながらカメラで撮影していくので、もとのフィルム

ムを傷めることがないまま4Kに映像化し、ブルーレイ・ディスクなどに保存する。  
大きなフィルム缶の保存場所に窮している地方自治体や図書館は少なくない。たとえ保存場所があっても、深刻な問題がある。映画フィルムは時間とともに劣化していくことだ。

こうした問題を一挙に解決するのが「オメガ・システム4K」なのだ。同社は、受託サービスの形で運用する計

画で、早くも自治体から独自撮影した記録映画を保存したいといった引き合いが多く来ている。いずれ商業映画、さらには海外からの需要も押し掛けてくるだろう。  
システムの開発には2年も要したが、長期・安定的な需要が見込めそうだ。

わずか3畳の事務所に山勝電子工業が誕生したのは1973年、金究社長が27歳の時だった。

金究氏は新潟県六日町（現在は南魚沼市）生まれ。7人兄弟の末っ子だ。父が亡くなり、姉を頼って川崎市に出てきて、叔父の援助で法政大学第一工業高校（現在の法政二校）に通った。卒業後は、叔父が経営する山勝工業へ。同社は東京・銀座に本社を置く建設工作機械の老舗問屋だ。

ここで働くうちに「結婚して家を持つには一旗上げるしかない」と決

意し、プリント基板メーカーに転職した。そこで「プリント基板の設計は面白いし、将来性も十分だ」と睨んで、今度はプリント基板の設計会社に転職して、仕事を覚えた。  
そして2人の仲間とともに独立した。叔父に頼んで「山勝」の名前を使わせてもらうことにした。

昼は職業別電話帳を頼りに、電気関連の企業に行から片っ端に電話する営業活動。しかし、99%は相手にもしてくれない。夜はわずかに確保した設計の仕事だ。  
そうするうちに、仲間は1人去り、もう1人も去り、とうとう1人になってしまった。

ところがその頃から、何回も電話をしているうちに、ついに担当者が出てきて話を聞いてくれる機会が増えた。相手してみれば、「本当にしつこく電話してくるから、試しに1枚だけ頼んでみるか」といった気持ちだったのだろうが、仕上がりを見て「また頼む」ということになった。

「プリント基板の設計は、情熱さえあれば誰でも一人前になれる」と金究氏は今でも信じている。70年代の末には、月に15枚の設計をこなして、150万円ぐらい稼ぐ高額所得者になっていた。



大勝負だった  
1億円超のCAD導入

そんなとき、久しぶりに故郷に戻ってみると、大学の電子工学科を出て大手メーカーにいたような人材がたくさんいることに驚いた。彼らは、親のたつての願いを聞いて故郷に戻ってはきたものの、キャリアを生かせるような職場がないので、雇ってくれる職場に身を置いている人材だ。こうした人材を放っておく手はない。それで、80年には六日町にプリント設計の拠点を設けた。

設計の受注が増え続ける中で、84年に業界で初めてCAD（電子設計システム）を導入したことは、まさ



新潟開発センター外観



レーザーダイオード応答性能自動検査機



レーザーダイオード検査用駆動基板ボード

に「冴えた勝負勘」ならではの大業だった。当時CADの価格は1億1千万円。日本を代表するような巨大メーカーですら、CADを購入するかどうか迷う時期だった。

銀行の融資を受けるのにも苦労した。融資がなかった。メーカーにCADの購入申し込みに行く、「ヤマカッ?これを導入して何をしますか?」と怪訝の表情だった。

しかし、CAD導入は、予想を超える成果を上げた。迅速で正確な仕上がりも大きかったが、「業界初」という宣伝効果はもっと大きかった。宇宙開発事業団からの仕事が舞い込んできた。「CADを導入している設計会社」として着目してくれたのだ。H1ロケットのエンジン制御部の電子回路基板の設計だった。

「大企業に勤めていた人はなかなか専門外のことには踏み出せない。しかし、うちで仕事をしていけば、自然に幅が広がる。そして宇宙開発事業団からの仕事で、自分たちは最先端の仕事をしているという自覚が出た。社員の定着率も向上した」と金究社長は振り返った。そして、宇宙開発事業団の仕事を見事に仕上げると、今度は防衛省関連の仕事が来るようになった。

そうするうちにCADの価格が下がり、ちよつとしたプリント設計事務所なら、導入して仕事に使う存在になってきた。プリント基板設計における同社の優位性が下がってきたのだ。

そこで、電子機器全体の設計・製造に進出した。設計のプロはいても、製造工程の専門家はいなかったから、苦労を重ねたが、1989年からはEMS（電子機器の受託設計・製造サービス）事業を開始した。すぐに大手も参入してきたが、戦い方がある。

山勝電子が狙うのは、回路技術が難しく、数量が限定されている部門だ。大手が得意とする「量産効果」を發揮できない分野と言える。

医療機器などがその典型で、一度納品すれば、次のシステム更新の時にも必ず声を掛けてくれる。そうしたユーザーを多数抱えていることが、山勝電子の強みだ。

90年代の終わり頃からは、システ



YAMA LIGHT (点灯)  
製品展示



見る物の自然な色合いを引き出す YAMA LIGHT



「かながわ産業Navi」でも大賞を受賞した。「知名度の低い中小企業にとって公的機関から表彰されることは、宣伝効果もあるし、社内の励みにもなります。とても嬉しいことです」と金究社長は言う。そして、こう続けた。

ム開発とともに、自社製品の開発に力を入れた。最初のヒットは、青色レーザーダイオードの検査・評価試験機だった。その第1号機は、青色レーザーの業界トップメーカーに納入することができた。

### 蓄積した経験から、次の開発テーマが見えてくる

この検査・評価試験機は神奈川工業技術開発大賞の奨励賞を受賞した。

神奈川県には電気・電子だけではなく様々なメーカーがひしめいている。京浜工業地帯の中心だ。そこでの受賞は大きな価値がある。2002年には液晶テレビのカラーフィルターへの画像処理検査装置を開発し、出荷を開始した。04年にはパッケージ基板の設計を開始するとともに、無線通信(DSCDMA)実験装置を開発した。

09年には超高密度プリント配線基板の海外委託生産を始めた。とても総勢85人の企業とは思えない。民生用の製品もある。

LED直管型のLED照明「YAMALIGHT」だ。海外メーカーの安価な製品にとっても太刀打ちできないと一般的には考えられていたが、その性能を評価してくれるところがあった。日本の造船業界だった。販売開始直後は円高の真つただ中で、為替レートが86〜87円。造船業界もコストダウンの必要があり、その中で誠心誠意対応した結果、耐久性と品質に優れた同社の「YAMALIGHT」がある大手メーカーの貨物船に採用された。地元の川崎市も評価してくれた。12年の「低CO<sub>2</sub>川崎パイロットブランド11」に選ばれ、「かながわ産業Navi」でも大賞を受賞した。

「しかし、ある程度、波に乗っている時期にこそ、次のこと、次のチャンスはどうつくるかを考えておかななくてはいけない」。同社の歴史を振り返ってみると、故郷に雇用を生み出し、地方に拠点をつくることを考え、当時業界ではまだ珍しかったCADを導入した。そして、EMSに踏み込み、EMSで好調な時に、他社が思いつかない自社開発製品への歩みを静かに進めてきた。

さらに、「10年先、20年先も必ずやってくる波に対応できるように、たゆまず開発を進めていくことが当社のモットーです」と、金究社長は将来を見据える。(にしはらかつひろ)

#### 山勝電子工業株式会社

- 代表取締役社長 金究武正
  - 創業・設立 昭和48年12月
  - 資本金 7000万円
  - 従業員 合計85名
  - 売上高 16億円
  - 事業内容 産業用高密度プリント配線基板回路設計・製作 応用電子機器設計・開発・製作、LED直管型照明開発・製作
  - 本社 神奈川県川崎市高津区末長1丁目37番23号
  - 電話 044-866-2411(代)
  - <http://www.yamakatsu.co.jp>
- (東京都民銀行 梶ヶ谷支店会員)